

北海道衣生活文化史の調査研究

— 残存陣羽織について —

福　山　和　子

北海道には明治維新後の開道を機に多くの人々が移住してきた。その中でも廃藩置県とともにあっての士族の移住がみられた。これらの人々は出身地より衣生活習慣、特に士族衣服類を持ち込んでいたとみられる。しかし、それらは開拓生活の厳しさの中で、労働着に作り変えられたり、経済的窮乏のため食料品に取り替えられたり、先住民族の人々に渡ったりしてほとんど消失している。

このようなことから北海道の開道期の一時期は農業、漁業の労働着と共に士族服飾は本道の衣服文化史を織り出していたのである。

しかし、これら士族服飾の残存資料は少なく、また、布地の脆化等がすすみ、衣服そのものの形態を失なう状態にあると判明したので昭和59年度「北海道、北の生活文化振興事業」の助成金を得て、北海道の衣生活を研究する会が残存資料の調査を行なった。本報告はその調査の一部、陣羽織について整理し記したものである。

調査に当っては下記の機関の協力を得て行なった。

- ・松前町郷土資料館 松前郡松前町字神明
- ・市立函館博物館 函館市青柳町17番1号
- ・市立函館博物館五稜郭分館
函館市五稜郭町44番2号
- ・伊達市立開拓記念館 伊達市梅本町62

調査方法は直接服飾資料観察による方法を用いた。上記資料館等に収蔵されている残存士族服飾すべての品目及びそれらの素材、構成寸法、構成方法、形体維持の状況について記録、計測、写真撮影による調査を行った。次いで品目別分類及び歴史資料と形体比較、素材検討等により資料分析を行った。

調査の結果

前記機関に収蔵されている士族服飾品は報告書¹⁾に記してあるが、品目のみを列挙すると次のとくである。

熨斗目、男子長着、男子羽織、火事羽織、男子袴、長袴、平袴、肩衣、袴、胴服、鎖帷子、陣羽織、直垂、革羽織、軽衫、振袖、小袖、打掛、帯、産着、童着物、童肩衣、童袴、兜頭巾、夜着、懸け守り、袋物、箱枕、槍先袋、祭礼用水干、等があった。

これらの中には歴史的価値のあるものが多く整理を急がねばならないが、今報告は士族服飾の特色を示す陣羽織について報告する。

各収蔵機関の所蔵陣羽織の概要

松前町郷土資料館所蔵の陣羽織

廃藩置県後当藩の士族はすべて本州の方に移動したため当館には士族の服飾資料はほとんど残されていない。松本家資料も含め7領の陣羽織が収められている。すべてに家紋が入る。形体に特徴的なものはみられないが素材にアッショウを用いたものや、夏物用と推察される組織のものがある等の点において貴重なものがある。各々の特徴について表1に示した。

松本家所蔵の陣羽織が数点あるが当家は松前藩出入商船の長者丸の船頭であった家柄である。当家の資料は藩主から拝領品としての士族服飾で、数点残されていたうちの陣羽織である。

市立函館博物館及び当館五稜郭分館所蔵の陣羽織

博物館に4領、五稜郭分館に5領が所蔵されている。博物館の方は表1で資料館番号のつい

表1 残存陣羽織の概要

所蔵機関	資料番号	摘要	備考
松前町郷土資料館	1	全面山丹錦使用、背に丸に亀甲蔓柏の紋入 松本家所蔵	写真12
	2	紺地毛織物、背に梅鉢紋入、堅襟に錦織使用、脇組ひもでとじ合せる	
	3	表布アソシ織、堅襟に山丹錦使用。覆輪に染革使用、脇組紐にてとじ合わせる。1と同紋入	写真13
	4	布紹織、波に海ツバメの紋様、三つ扇紋入 アイヌ資料として所蔵	写真11
	5	茶の麻平織、背面に井桁左立一引紋 アイヌ資料として所蔵	
	6	白ネル製、背面に丸に鳶紋入 アイヌ資料として所蔵	
函館博物館及び五稜郭分館	7	白ネル製、丸に笠の紋付	館資料番号 431
	8	深緑錦織童雲模様、背面平角に「大」字紋袖下および脇が組紐でとじ合わされている	館資料番号 432 写真1,2
	9	蝦夷錦、背面巴紋、田原音八着用	館資料番号 433
	10	黒ラシャ製、裏布白木綿に戦死状況を墨書、弾痕数か所、田原音八着用	館資料番号 434 写真6
	11	白帆布地全体に竜の墨絵画、松前藩士着用	館資料番号 435 写真7
	12	赤ラシャ製、背面に竜の紋様が刺しゅう等でつけられている	写真5
	13	白帆布製、全体に竜の墨絵	写真8
	14	黄土色ラシャ製	
	15	錦織製、衿着物型	
	16	青ラシャ製、竹に雀の紋、香車、袖口にフリルつく、藩主着用	写真3
	17	ビロード製、竹に雀の紋、藩主着用	写真15
	18	緑色ラシャ製、二つ巴紋、扇の図柄あり、深田という記入あり	写真17
	19	青ラシャ製、白しづり、梅鉢紋、記神	写真9
	20	赤ラシャ製、違い鷲の羽紋、記神	
伊達開拓記念館	21	紺色綾織物、三階松の紋、記神	
	22	赤ラシャ製、たて二引紋、記神	
	23	赤ラシャ製、袖肩あきに白ブレードで線入る	写真4
	24	赤ラシャ製、木瓜紋、肩に飾りあり、肩に飾りつく	写真16
	25	赤ラシャ製、菱紋	
	26	赤ラシャ（エンジ）製、紋つけ直しの形跡あり、岡本正明の記入あり	
	27	赤ラシャ製、違い鷲の羽紋、記神	
	28	赤ラシャ製、木瓜紋	
	29	赤ラシャ製、凸紋	
	30	赤モスリン製、三星一引紋	
	31	赤ラシャ製、凸紋	
	32	赤ラシャ製、凸紋、裏紺錦織	
	33	赤ラシャ製、凸紋（白）	
	34	赤ラシャ製、凸紋、裏紺錦織	
	35	赤ラシャ製、凸紋（黒）	
	36	赤ラシャ製、凸紋、原型をとどめず	
	37	赤ラシャ製	
	38	赤ラシャ製、白ラシャ布で円紋様、堅衿を起して着用	写真10

ていないものに、素材的にも形体的にも貴重なものがある。また五稜郭分館のものは、函館戦争の折に着られたものが整理されている。

伊達市立開拓記念館所蔵の陣羽織

当館には藩主のものをはじめ、家臣の陣羽織23領が所蔵されている。

当市は開道後、廃藩置県にともなって藩主・家臣共々に移住した士族集団の地である。故に、当館には伊達支藩の亘理城主であった伊達邦成を中心とする士族の資料が多く残されている。

陣羽織は表1に示した通りであるが、資料番号16、17は藩主邦成が着用したものであり、素材、構成寸法に他の物との大きなちがいがみられる。

陣羽織の服飾史資料としての分析

1. 構成寸法について

各陣羽織の構成寸法は図1の個所を計測、表2はその寸法表である。

陣羽織は具足羽織ともいわれ16世紀ごろから戦場で鎧の上に着用した短衣である。戦場用の衣服として武装の防寒や防雨の必要から生れた

戦衣であるため実用的性格を強く有している。そのため形状は特に制約ではなく自由で、一つ一つが違った形をしている。只、鎧の上からの着用等その性格から形は全体に大きく、丈は一般に長く膝下に及ぶものもある。

このような性格を有していた陣羽織も江戸時代になると戦衣としての性格がうすれ儀礼服化してくる。同時に自由だった形も定形化し図1に示すような形になってきた。すなわち、袖がなく、背に大きく家紋を入れ、肩には太刀受けをつけ、衿は大きく折り返るようになる。

本調査の資料の製作年度は江戸末期のものであるが構成形態が、大きな袖をつけた古様式を示したもののが函館五稜郭分館展示のものに1領ある。これについては意匠的分析の所でくわしくふれる。

資料38領中37点までは基本的には図1の形態になるものである。

北村哲郎氏によれば「陣羽織は武装の変化の中から生れたものと考えられます。白兵戦が主体になって、左右の腕を籠手で防御するようになりますと、従来の直垂の袖は邪魔になり、鎧直垂の代りに、袖のない胴肩衣や半袖の鎧下着、

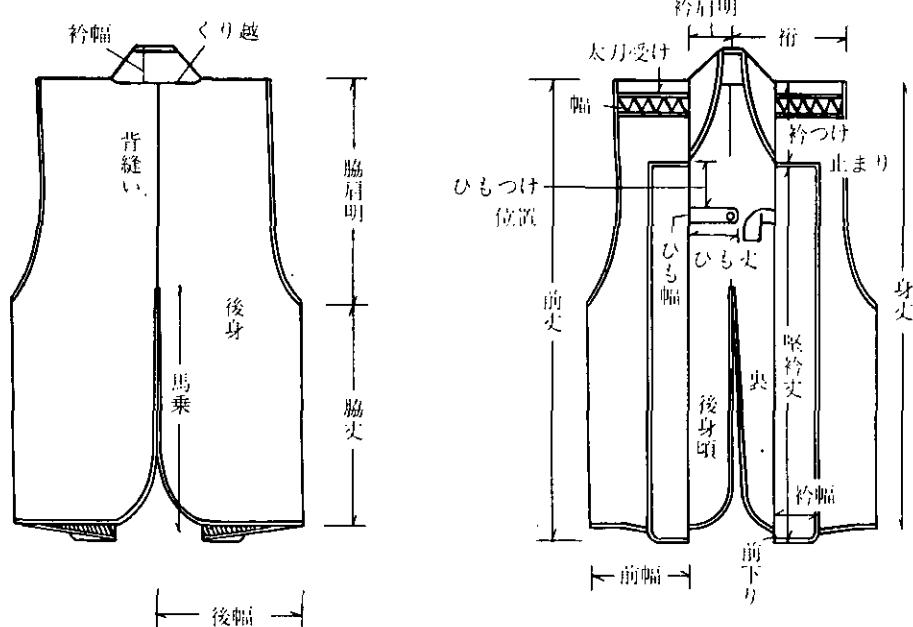


図1 計測個所図

表2 陣羽織計測寸法表（資料番号は表1と同一番号を示す）

身丈	前丈	脇肩明		馬乗	後幅		前幅	桁	衿肩明		衿幅	衿付 止り	堅衿幅		堅衿丈 上部 幅	脚ひも 位置	ひも丈	太力受 け幅									
		前下り	後下り		脇幅	裾幅			くり				8.0 12.0	83.0													
1	95.0	97.0 2.0	53.0	42.0	52.0	32.0	36.0	26.0	28.0	10.0 1.0	5.5	12.5	9.5 11.5	80.5	12.0	12.5 4.0	3.5										
2	84.5	86.5 2.0	38.0	46.5	45.0	32.0	32.0	20.0	28.0	10.0 1.0	7.0	11.0	9.5 12.5	75.0	14.0	12.5 3.0	3.5										
3	88.5	90.0 1.5	49.0	39.5	45.0	31.0	34.0	22.0	24.0	9.0 1.0	6.8	14.0	9.0 11.0	76.0	13.0	11.5 3.0	4.0										
4	92.0	96.0 4.0	50.0	42.0	52.0	35.0	35.0	24.0	28.5	8.5 1.0	7.0	13.0	8.0 12.0	83.0	11.0	12.0 3.5	3.0										
5	88.5	94.0 5.5	46.0	42.5	49.5	31.5	33.5	21.0	30.0	11.0 1.0	8.0	11.5	8.0 9.5	82.5	13.0	11.0 3.5	6.0										
6	86.5	90.0 3.5	48.0	38.5	48.0	34.0	34.0	26.0	24.0	8.0 1.0	6.0	13.5	8.0 11.0	76.5	11.5	10.5 2.7	3.3										
7	96.0	96.0 0	50.0	46.0	56.5	35.5	35.5	34.0	27.5	9.0 1.0	9.5	—	—	—	—	9.0 2.0	2.0										
8	104.0	110.5 6.5	袖口 63.0	52.0	58.5	34.0	34.0	24.0	68.0	10.0 1.5	6.3	14.0	10.0 10.0	106.5	10.5	12.0 3.5	3.5										
9	98.5	101.5 2.0	63.5	45.0	53.0	33.0	34.0	24.0	27.0	9.0 1.5	7.0	13.5	9.0 11.3	88.0	15.0	10.5 1.5	3.0										
10	90.0	93.0 3.0	45.0	45.0	45.0	31.5	41.5	31.0	26.5	10.0 1.0	7.0	8.0	9.0 11.0	85.0	14.0	11.5 3.0	1.5										
11	101.5	110.5 9.0	51.5	50.0	58.0	31.5	33.0	22.0	27.0	11.0 1.5	6.0	9.0	9.5 11.0	101.5	20.0	13.0 2.8	4.5										
12	86.5	91.5 4.0	50.0	36.5	45.0	31.0	31.0	23.0	28.0	8.0 1.0	7.0	18.0	9.8 11.0	73.5	9.0	10.0 2.0	4.0										
13	94.0	97.5 3.5	48.0	46.0	56.0	30.5	37.0	27.0	26.5	10.0 1.0	6.3	16.0	9.0 11.0	81.5	10.5	10.5 4.5	4.0										
14	92.0	99.0 7.0	52.0	40.0	52.0	33.0	33.0	21.0	31.0	10.0 1.0	6.5	16.0	13.0 13.5	81.0	12.0	10.5 3.0	5.0										
15	73.0	78.0 5.0	43.0	30.0	39.0	30.5 (内マチ4.5)	33.0 (内マチ4.5)	22.0	29.0	10.0 1.0	10.0	—	—	—	26.0	14.0 4.0	3.0										
16	99.5	104.5 5.0	64.5	45.0	50.0	40.0	45.0	28.0	34.0	12.0 1.5	12.0	—	12.0	102.5	31.0	13.0 3.3	4.0										
17	97.5	105 7.5	44.5	53.0	58.0	35.0	41.0	35.0	27.5	9.5 1.5	6.3	14.0	12.0 15.0	90.0	7.0	12.0 2.5	3.5										
18	89.0	91.0 2.0	55.0	34.0	47.0	30.0	30.0	20.5	28.5	9.5 1.0	6.0	17.5	8.0 8.5	73.5	12.5	8.0 3.5	2.5										
19	88.0	92.5 4.5	47.5	40.5	48.0	31.0	31.0	20.0	27.5	11.0 1.0	6.5	14.5	8.5 9.8	78.0	12.5	12.0 2.8	3.5										
20	88.0	90.5 2.5	51.0	37.0	50.0	31.0	31.0	20.0	27.0	11.0 1.0	7.5	15.0	9.0 10.0	74.5	10.5	12.0 3.0	5.0										
21	83.0	85.0 2.0	47.5	35.5	42.0	34.0	34.0	21.5	29.5	12.5 1.0	6.0	11.5	10.5 9.0	73.5	13.0	12.5 1.5	4.0										
22	85.0	88.0 3.0	52.0	33.0	45.5	33.0	33.0	22.0	28.5	11.0 1.0	6.5	11.3	9.0 9.7	76.7	14.5	13.0 3.5	3.2										
23	91.0	98.0 7.0	51.0	40.0	48.0	34.0	34.0	22.0	32.5	12.0 1.5	7.0	15.0	12.0 12.0	83.0	10.0	13.0 3.5	—										
24	86.5	88.0 1.5	52.0	34.5	46.5	33.0	33.0	23.0	30.5	10.0 1.0	6.5	—	—	—	—	—	3.0										
25	86.0	91.0 5.0	52.0	34.0	46.0	32.0	32.0	22.0	30.0	10.0 1.0	7.0	—	—	—	—	—	3.0										
26	88.0	93.0 5.0	48.0	40.0	47.5	30.0	30.0	20.0	33.0	10.0 1.0	5.0	17.5	10.0 10.0	75.5	10.0	12.0 3.0	3.5										
27	87.0	90.0 3.0	52.0	35.0	47.0	32.0	32.0	22.0	26.0	10.0 1.0	6.0	—	—	—	—	—	3.5										
28	85.0	91.0 6.0	51.0	34.0	46.0	30.0	30.0	21.0	25.0	9.0 1.0	6.0	—	—	—	—	—	3.5										
29	88.5	94.0 5.5	50.5	38.0	51.0	30.0	30.0	21.0	26.5	9.0 1.0	6.0	15.5	8.0 8.5	78.5	12.0	12.0 3.0	3.0										
30	90.0	95.0 5.0	50.0	40.0	49.0	32.0	32.0	22.0	22.5	10.0 1.0	5.5	—	—	—	—	—	3.5										
31	89.5	93.0 3.0	50.5	39.0	46.0	32.0	32.0	22.0	29.0	10.0 1.0	6.5	14.0	10.0 11.0	79.0	13.0	11.0 3.5	3.5										
32	89.0	93.0 4.0	52.0	37.0	52.0	32.0	32.0	19.0	28.0	9.0 1.0	6.0	—	—	—	—	—	3.0										
33	87.0	92.0 5.0	52.0	35.0	47.0	31.0	31.0	20.0	28.5	11.0 1.0	6.5	12.5	8.5 10.0	79.5	14.0	12.5 3.0	3.5										
34	87.0	89.0 2.0	50.5	36.5	47.0	29.5	29.5	20.0	28.0	9.0 1.0	6.5	16.0	7.5 10.0	73.0	10.5	10.0 3.0	3.0										
35	88.5	90.5 2.0	50.0	38.5	45.0	30.0	30.0	20.0	28.0	10.0 1.0	6.0	15.0	7.5 9.5	75.5	12.0	10.0 3.0	3.0										
36	88.0	90.5 2.0	50.0	39.0	49.0	31.0	31.0	21.0	28.0	10.0 1.0	6.0	—	—	—	—	—	3.0										
37	88.0	90. 2.0	48.0	40.0	49.0	30.0	30.0	19.0	29.0	11.0 1.0	6.0	—	—	—	—	—	—										
38	81.5	86 4.5	44.0	37.5	41.0	44.0	44.0	33.0	29.0	11.0 1.0	8.5	11.0	7.5 16.0	75.0	27.0	11.5 2.5	—										

肌衣などと称された簡便で実用的なものが着用されるようになったのです。」²²と記され、この鎧を脱いで客儀を整えるために羽織ったという。すなわち陣羽織は武具の上からだけではなく、鎧直垂や鎧下着等の上から着られるようになつたということで、このことから構成寸法の丈、幅に種々の大きさがあることが理解される。

今調査では、身丈及び身幅の大きい武具の上から着用したと思われる陣羽織は資料番号8及び11の函館博物館五稜郭分館所蔵のものと、資料番号16及び17の伊達市立開拓記念館所蔵の藩主着用のものがあげられよう。

その他のものは、身幅が前後共に武具の上からだとすれば、ゆとりが少ない。しかし着用上からは、前紐や肩脇明きの長さ、馬乗りの深さからは着用活動上の幅の移動は可能な形態のため胴丸や腹巻の程度の武具のうえには着用できただろうと推察される。

2. 素材について

残存資料の素材は、アツシ、山丹錦、羅紗、錦、ピロード、紺、麻、綿ネル、帆布等種々にわたっている。

松前城資料館所蔵資料番号1は陣羽織の素材は山丹錦である。松前藩はアイヌ人との蝦夷交易、山丹人と北海道アイヌとの交易すなわち山丹交易権を独占していた。山丹交易による虫巣の玉、山丹服、山丹裂はこの地での入手は容易であった。松前には寺社の柱かくしや仏壇等の敷物等に山丹錦が多く用いられ現存していた。

資料番号（以下番号は省く）1の山丹錦は織紋様で五本瓜の龍が織り出され背部左右に一匹ずつ、背面肩部から前面肩部にかけて左右に各一匹ずつ、前面胸部に一匹ずつ配置され、裾部分には波涛紋様、全体には雲紋様等の吉祥紋様が織り込まれている。堅衿部分は山丹錦が用いられているが花紋様の織られたものである。山丹錦を

全体に用いた陣羽織はごく稀であり、貴重な資料である。（写真12）

資料3の素材はアツシである。北海道アイヌの人々が衣服に用いたアツシを陣羽織に用いためずらしいものである。また構成上、覆輪に鹿皮に梅模様に染めてあるのを用いているのもめずらしい。（写真13）

資料1、3は松前藩主宗広より拝領品であることから山丹交易にかかる布地が用いられている点において理解される。

資料15は破損がはげしいが竜を図案化した錦織のものである。形態としては小ぶりであるが、錦織の服飾資料としては貴重である。

資料16、17は伊達旦理藩主着用のものである。資料16は表は濃い青緑地の外来品の羅紗を用い、裏布に雲紋を菱紋に図案化した金襷を用い、衿の一部に植物が図案化された柄の天鵝絨地がつけられている。

資料17は植物を図案化した舶来の天鵝絨地である。資料16、17いずれも江戸後期の舶来の布地特に天鵝絨を知る手がかりとなる資料である。

形態デザインと細部のデテールについて

戦場用の衣服として、身分の識別や武威を示す目的があった陣羽織は実用性と共に装飾的性格を有していた。

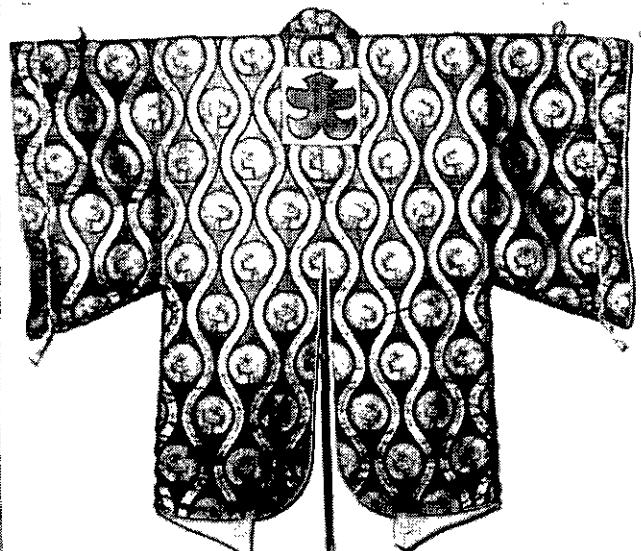


写真1 資料8 袖つきの陣羽織

構成デザインとしては、図1に示したようなものが多いが、中には袖をつけたり、図柄に凝るものもあった。

残存資料8は写真1のように袖がついているのである。袖口には括り緒がつき、袖下と脇は組み紐でとじ合わされている（写真2）

今回の調査中北海道に残る資料では袖がついているのはこの一領のみである。しかし、袴丈は66.5cmであるので、ひじ下10cm位の長さになるため実際に袖口の括り紐をしめたかどうかは不明であるが活動性からみて、ひじでしばり籠手をつける形態となるが、どちらかというと装飾的性格の強い括り緒と考えられる。（写真2）このような斬新な形態は、戦国時代によくみられ、紺羅紗違鎌文陣羽織（東京国立博物館蔵）もその例であろう。

山辺知行氏が指摘するように「1人だけほかと変った形にして身分を明らかにする必要がある時には大きな袖をつけたりしているなど、古様を残したもののがみられる」³¹ ことからも函館戦争の折に、指揮官の装いとして用いられたものとしての資料として評価しえよう。

同様に袖部分すなわち脇肩明き部分に装飾が



写真2 資料8 袖口の括り緒

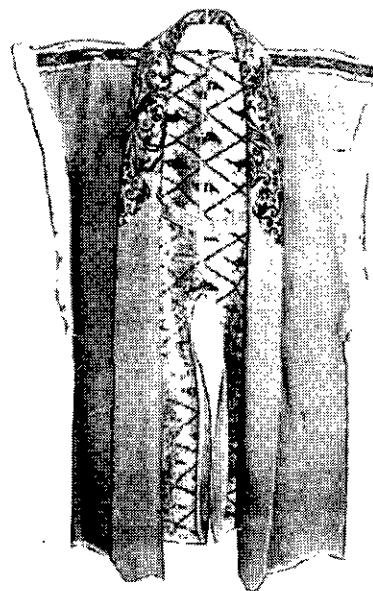


写真3 資料16 脇肩明にフリルのついた陣羽織

どこでされているのが資料16、写真3の陣羽織である。

脇肩明き部分に3.5cm幅の裝飾りが3枚重ねてつけられている。布地は縮面を用い、奉書を芯のように入れ、布と共に折られている。これが表側より黄色、朱、白の順に重ねてつけられている。写真3にみられるように広い肩幅をより広くみせ、堅衿型ではなく羽織の衿のように衿がつき領まわりに天鵝絨地がその図柄を強調するかのように動きのある線でカットされ金糸でとめつけられ、一つの線として生かされている。更には裾の線が大きな波線でカッティングされ、陣羽織としての直線的日本の軍装の中に西洋的な曲線と図柄を組みこんだデザインはみるべきものがある。また写真4のように肩明き部分に白の組紐で線を入れるというものもある。

次に背面の図柄のデザインをみると興味深いものがある。資料12、写真5のように波紋と竜の紋様が刺繡とアップリケとキルティングが組み合わされた技法で表現されている。竜や火炎の表現は和紙を基礎にふくらみは綿で盛り上げその上に和紙をのせて形をととのえ図の表布をのせ金糸または銀糸でこまかくまといつけてあ



写真4 資料23 脇肩明きに白の組織物で線入る

写真6 資料10 竜模様刺繡



写真5 資料12 赤羅紗に竜紋様の刺繡

写真7 資料11 白帆布に竜の墨絵

る。武威を表わし、人目をひくデザインである。同様の刺しゅう技術で竜を表現してあるのが資料10、写真6である。この竜は前記竜とは異り、日本刺しゅうで雲紋と共に円をえがくような図

柄で表現されている静的なデザインである。

同じように竜の図柄は資料11、13、写真7、8のように白帆地に墨で描かれているものがある。暗雲の中で竜が天中を鋭い目つきで睥睨し

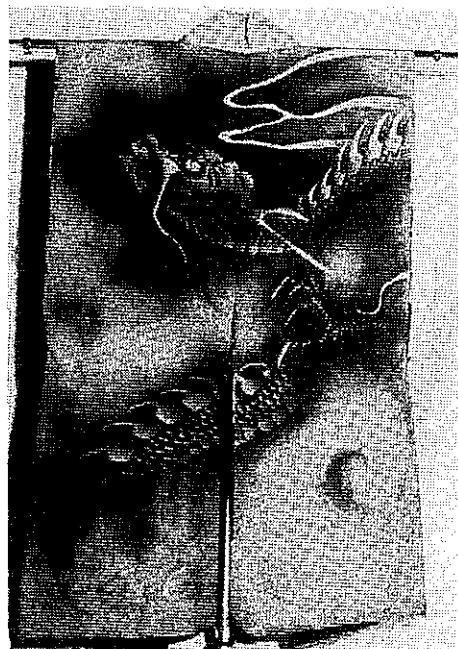


写真8 資料13 白帆布に竜の墨絵

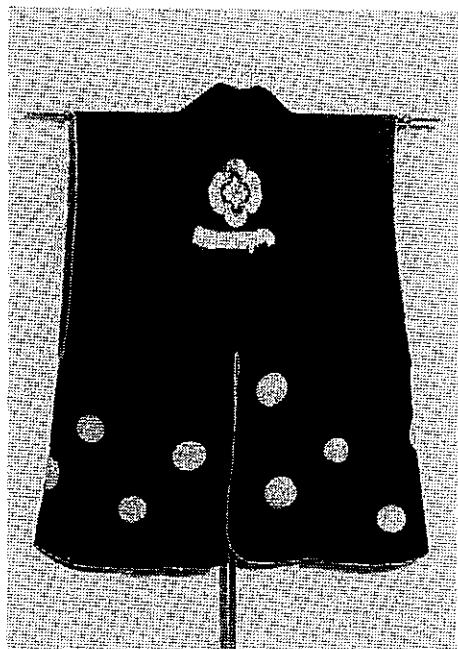


写真10 資料38 赤羅紗に白の円模様

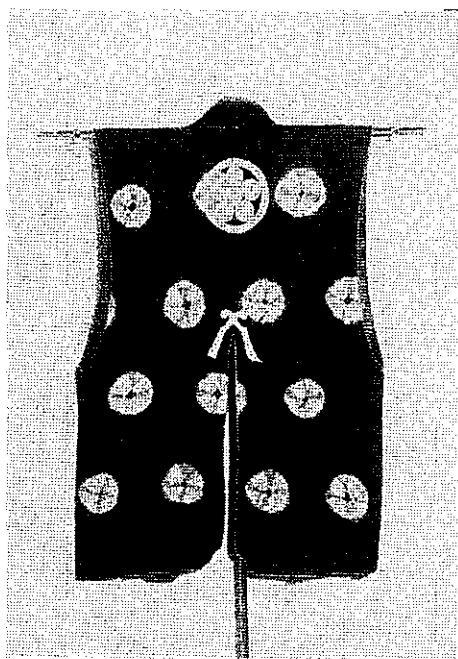


写真9 資料19 青羅紗に白の絞模様

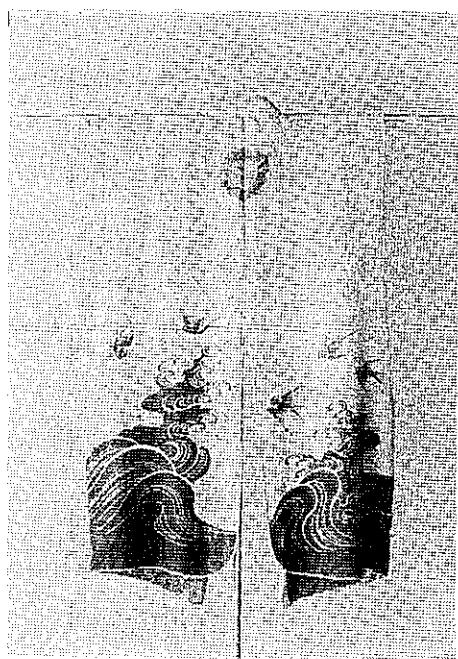


写真11 資料4 波に海つばめの模様

ている姿を描いたものである。竜は仏法守護の意味と雲雨を自在に支配する力を持つ竜神の意味とから用いられることが多かった。図案化されたものでは資料8、14にも用いられている。

このような猛猛しい図柄とは異り、静かなデザインに円紋様がある。資料19、38、写真9、10がそれである。

写真9のは、白地羅紗を藍色に染め7～8cm

の大きさに円形にしばって白地を残した紋様である。写真10の方は緋の羅紗地に白の羅紗で5~6cmの大きさの円を細かくかがりとめている。

前者の絞り染の方は円の配置は左右のづれはあるとしても、絞り染特有の不定形の円紋で立体感を出している。それに対して後者のパッチワークの方は円の大きさにはらつきがあると同時に、配置に左右の違いがみられる。写真10で理解されるように、写真で左側は4ヶの円の配置は右側より下目であると同時に円の大きさが大きい方は直径は6.5cm、小さい方は5.3cmで、右側より直径で0.1~0.2cm大きくなっている。写真の右側の5ヶの円の配置は左側よりやや上から配置され下は左側より円の直径の1/2程下の位置まで配されている。円紋の大きさも直径6.3cm、5.2cmと左側よりやや小さい。このように只の白い円紋の図柄であるが、右側の人体の動き、右から左にかけての図柄の流れの構成に、江戸土族の美的感覚の繊細さを知らされるものである。

このような定形化と繊細さの表現は夏用の陣羽織にもみられ資料4、写真11みられるように単の紹に図柄を染めぬいたものである。波涛の紋様に海燕の図柄であるが右側が小さな波涛と三匹の海燕、左側が大きな波涛と二匹の海燕が表現され、左右の動きのある均合いを見ることができる。

残存陣羽織の定型化したデザインの中で背部のデザインのポイントは家紋であった。資料中の多くの家紋は背部に直径約12~14cmの大きさで配置され、儀礼用としての意味あいが強くなっていることが推察される。これら家紋の表現は地色との配色等とのバランスに美的な構成をみることができる。

写真12は松前城資料館に展示されている松本家所蔵のものであるが、直径16.5cmの丸に亀甲蔓柏の紋で、山丹錦によく調和された配色である。紋は、赤茶色の和紙の上に朱子地を基礎に金糸で紋がつくられ、それを背部にこまかく止めついている。ほとんどの家紋はこの方法がとられている。資料3、写真13は薄茶のアツシ布に黒の羅紗を和紙と共に家紋の図に切り取られ

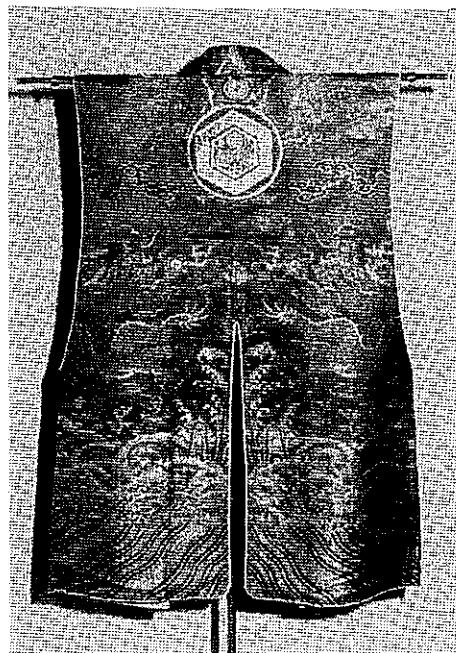


写真12 資料1 山丹錦に金糸で亀甲蔓柏紋

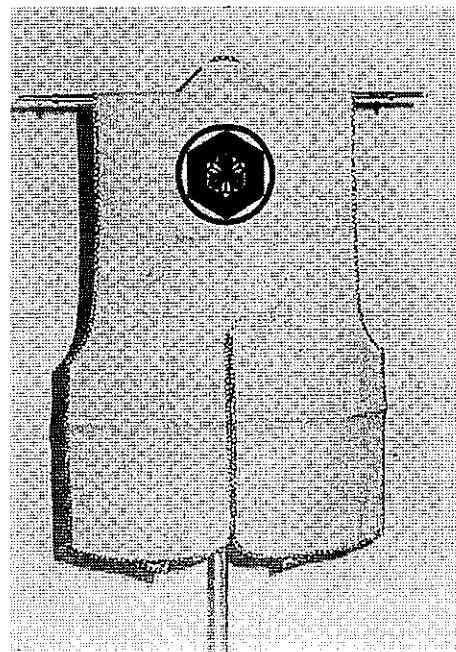


写真13 資料3 黒羅紗で亀甲蔓柏紋

たものをアツシに直接とめている。柏の葉脈は薄茶の絹糸で刺しゅうされており、黒い家紋が浮き上ってみえる。

資料16, 17, 写真14, 15のように竹に雀の紋

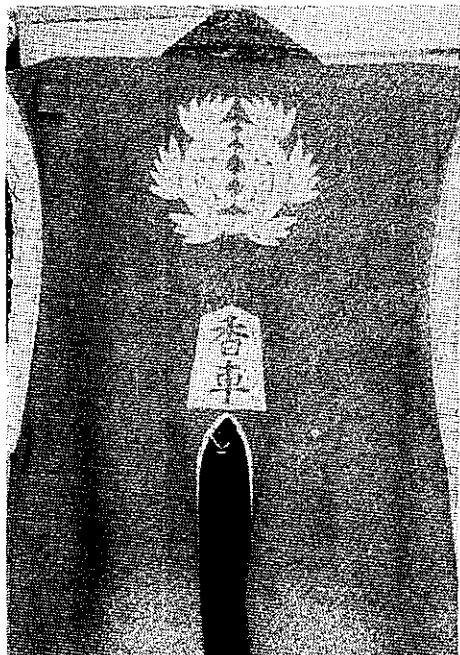


写真14 資料16 竹に雀の紋と香車の紋



写真16 資料24 馬乗りの上に軍配の縫い取りの跡



写真15 資料17 竹に雀の紋

が20cmの大きさの白羅紗でつけられている。更に家紋の下に香車の図がつけられており、戦場における戦意向上の意味すなわち、後退することなく前進することの図案的意味で用いられて

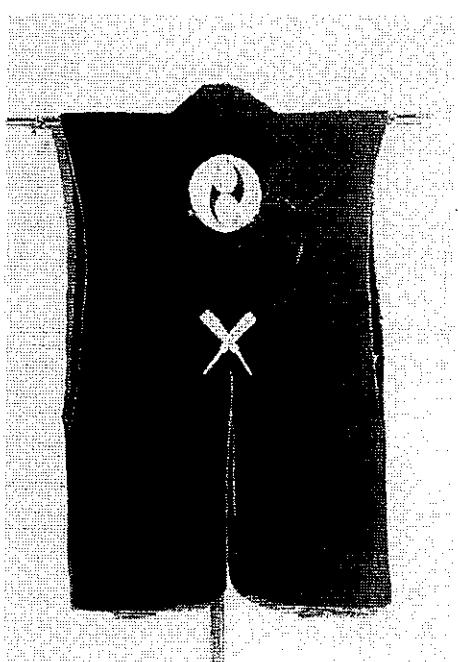


写真17 巴紋と扇の紋

いた。同様に家紋の他に戦場での指揮的意味、戦意向揚の表現としてつけられた図柄に写真4のように鶴紋の下に采配の図がつけられたり、写真16のように軍配を配したり、写真17のよう

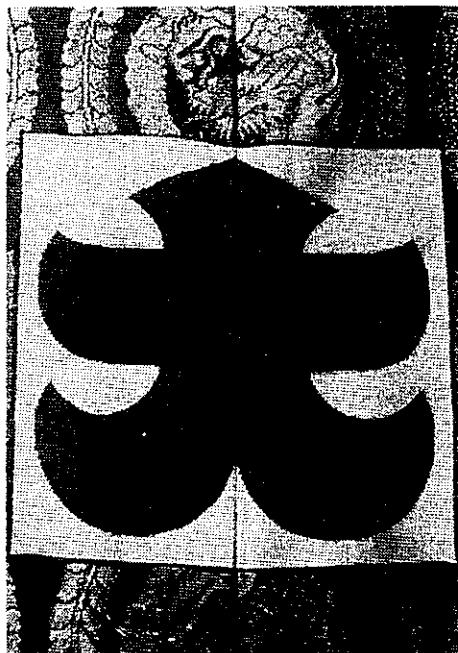


写真18 資料8の平角に「大」の紋

に扇を配するなど吉祥的図柄が配されている。先にのべた竜の図が描かれているような場合はほとんどみられないが無地の背面では、家紋が自己表現とつながって重要な身分表現の役目をになっている。同時に背面の空白を家紋で構図をひきしめているのである。

ほとんどが付紋なのに対して織紋がつけられているのが資料8、写真18のように平角に大字紋がつけられているのがある。織紋はその他資料4、5も同様である。

構成及び縫製について

多くの陣羽織は着物の構成方法と同じである。前後の肩には縫い目ではなく3.0cm幅の太刀受けがついている。表身頃の背中心線は縫い目があり右身頃側に片返しになっている。脇線も中表に縫われ縫いしろは片返しになっている。裏布は、絹織物羽二重がつけられている場合は背中央に縫い目が入っているが、太物が用いられている時には背縫はない。脇の縫い方には二通りあり、表身頃のみ前後合わせて縫い合わせる場合は裏布も裏布のみを合わせて縫う。他には後身頃の表身頃と裏身頃を前身頃の表と裏身頃ではさん

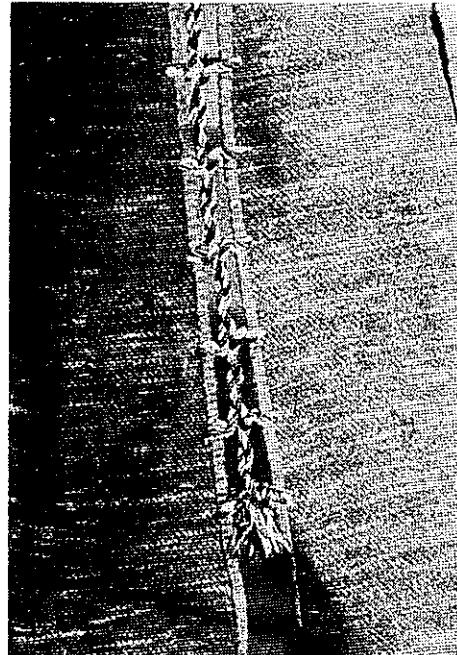


写真19 資料2の脇の組紐のわたしかた

で縫い、縫いしろを前身頃側にして前身頃の表と裏を起して形をととのえる方法もある。小衿の部分豎衿の部分は各々の表と裏のえり布で身頃の表、裏をはさんで縫い、縫いしろはえりの中になるよう各々の衿を起して型をととのえる。その後、小衿、豎衿のまわりを組織物で覆輪仕上げし、そのつづきで裾、馬乗り部分とされていく。覆輪の方法は表布と中表に組織物が合わされて縫い、組織物を0.3～0.5cmの幅にととのえて裏身頃側に折り返し、星どめ状の半返しで止められていたり、細かくまつられている。

資料2、3、8のように脇縫いがなされておらず、前、後別々に各々の裏布と合わせて覆輪仕上げされている場合もある。組紐の通し方は写真2、19のように通されている。

縫製方法にはいろいろあり厳密なルールはなかったようである。只、縫いしろの幅はせまく、脇肩明や裾等は丈夫に、しかし厚みを出さない工夫がなされ、組織物で覆輪仕上げされている点はそれまでの衣服類の縫製文化ではありませんみられない技法であり、兜頭巾や筒袖羽織、火事羽織等、動的な服類の仕上げ技術に多くみられるようになる。

太刀受けは厚い和紙の上から布をのせ、またトリミングがほどこされベルト状の形をなして肩の部分にくけるようにとめられている。それ自身は太刀受けとしての意味と形態を残しているが、陣羽織独自の肩を水平に張らせた威嚇の表現の構成技術としての目的もあったと考えられる。

肩を水平に保つための工夫は、資料16のように肩脇明に襞を折ったものを三種重ねると、その重みで肩線及び肩脇明の直線の表現を保つために襞の中には和紙が入れられ、更にその取りつける肩脇明きにそって細いくじらのひげが縫い代にからみ縫いでとめつけられていた。

また形を保つということで芯を用いるのであるが、芯の目的をなすものとして陣羽織には和紙の使用が多い。資料14では背肩部分に和紙が用いられていること。小衿、豎衿部分に和紙に入れられると、家紋の台紙に和紙が用いられていること等々があげられる。

前明きの止めは覆輪された3cm幅程のベルト状のもの、ひょう丹形をしたもの等があるが、いずれもボタン止めになっている。

豎衿は折り返りを落ちつかせるために、上部端を組み紐で結び輪をつくり、身頃についたボタンに通して止める方法が取られている。

考察とまとめ

以上、北海道に残存している陣羽織の構成寸法、素材、形、構成及び縫製について記した。

陣羽織が北海道に残存している経緯をみると、移住土族集団が持込、北方の警備のために武具と共に保存されてきたもの、松前藩士はじめ、和人が先住民族に褒賞品又は物と交換の品として渡ったもの、松前藩主からの賜物として家宝として保存されているもの、函館戦争の遺品として残されているもの等がある。

形態デザインとしてはすべてがそれぞれに評価されるものであるが服飾史資料として評価し得るものは陣羽織として戦衣の形態を残しているもの、素材として江戸時代特に後期の交易状況を示すもの、という点から次の数領ではなかろうか。

第1には戦衣としての形態を残しているものは資料16、写真3の伊達藩主着用の陣羽織である。背に指揮者としての意志表現である香車の駒形がぬいつけられているが、同資料館には、藩主の使用した甲冑の背当や襦当に香車の文字が染められているのがあることから、これらと組み合わされて用いられたのではないかと考えられる。その甲冑から推はかると約200年前の陣羽織ではなかろうかということになる。またこの陣羽織の背に旗指物をさすのではないかと思われる丸い2cm程の幅の輪が共布についている点も興味深いところである。

更に素材的に資料として重要なのは、資料17の舶来地の天鵝絨、資料1の山丹錦でつくられたもの資料3のアツシでつくられたもの資料4の縞でつくられたもので、これらは素材そのものが貴重であること、更には山丹交易、アイヌとの交易、西欧との交易が江戸時代後期に行なわれていたことの証明にもなるものである。また資料3の覆輪の革染は素材としても珍らしく革染の貴重な資料である。

函館戦争時着用の資料としては資料10には裏布に田原音八の戦死の状況が墨書きされているものがあり、戦争資料として貴重であろう。

形態的には資料8のように袖がつづいて構成されているのは北海道には一点しかなく、その意味で貴重な資料である。また資料16のように脇肩明きに飾布がつけられるなど装飾性の高いものは、江戸期中期以後の陣羽織の歴史的推移を示す資料と判断される。

今調査は道南を中心に行なったが、石狩当別にも伊達岩出山藩の服飾資料の中にも形態的にも素材的にも貴重な資料があるので今後調査をつづけたい。

更に、先住民族であるアイヌ民族の手にも多くの陣羽織が所蔵されていると考えるので今後、道央道北の調査を共にすすめたい。

この調査に当たり快く御協力下さいました松前町教育委員会の久保泰様、松本家の方々、函館博物館の長谷部一弘様、同五稜郭分館の中村

公宣様、伊達開拓記念館の阿部智様に誌面をもって御礼申し上げます。

また、調査にあたって御指導御助力下さいました静修短期大学永田志津子先生に厚く御礼申し上げます。

参考資料

- 1) 「北海道開拓期移住土族の衣服調査報告書」昭和59年度北の生活文化振興事業、北海道の衣生活を研究する会
- 2) 「陣羽織」北村哲郎著、げんりゅう、20号、源流社
- 3) 服装大百科事典、被服文化協会、文化服装学院出版局、p. 488、陣羽織、山辺知行